

今月の 我がマチの 一番星☆



しののめ交流館内ゲートボール場完成に伴いあいさつする編田会長(写真右)



編田久乃さん

自分の健康と社会奉仕のために

丈夫な体は農業で鍛えたと
いう編田久乃さん(早来大町)は走ることや相撲などスポーツをすることが好きだと言います。

戦地から戻り農業に従事。その後離農して15年ほど民間会社に勤め、昭和61年に早来町の住民に。地域の人の交流を図るためさまざまな事業や活動に参加しています。

「ゲートボールを始めた理由は認知症の予防のためで、家族に迷惑をかけない対策ですよ」と苦笑いする編田さんは、現在あかね生き生きクラブの会長を務めています。

ゲートボール仲間の中には人工透析を受け、持病の糖尿病を患っている人もいますが、しののめ交流館の開館日に顔を合わせることを楽しみにしているとのこと。

米寿を迎え自分の歯が22本ある健康な編田さんは周囲から頼られることが多く、陸上競技の審判員資格を活かし早来ホスピリティ駅伝の役員として長年関わってきました。

安平町ゲートボール協会の会長としてしののめゲートボール場の早期建設に向けて

「生き生きクラブは発足時に70歳以上の会員は数名でした。」

「生き生きクラブは、空き缶や古新聞を回収する活動もしており、その益金で車いすなどを購入し社会福祉協議会に寄贈してきました。」

「生きている間は発足時に70歳以上の会員は数名でしたが、今では56人に増えたんですよ。」と話していました。

編田さんは自分の健康づくりを進めながら、社会に貢献できることは今後も続けたいと願い、参加者が笑顔で楽しむことができるようにしていきたいと語っていました。

高齢者のスポーツ振興を目指して



山田猛司さん

安平町で日本ゲートボール連合1級審判員の資を持つ山田猛司さん(追分花園)は、町の体育指導委員をしていたときに高齢者でもできるスポーツを普及することの必要性を感じ、レクリエーション指導者講習会に参加してゲートボールと出会いました。

当時、児童と高齢者のふれあい活動に取り組んでいた福祉系の職員と相談し、学校のグラウンドの一部を借りてゲームを実施。「毎回うライン引きは大変な作業でした」と苦労話を語ります。

3級審判員を昭和59年に、2級審判員を昭和61年に取得し、同年5月に追分町ゲートボール同好会を結成しました。

会員が増え町外での大会が多くなり、規則の解説について聞かれたことを振り返り、「競技者に正しく理解してもらうためには日々の勉強が大切ですね。有資格者になると特に実感しています」と苦笑い。「私は会長や代表者など組織のトップになるより一歩下がった位置が好きです」と話す山田さんは、町内会やSL保存協力会でも人望が厚い方です。安平町ゲートボール協会の設立に尽力し、現在副会長を務め、早来と追分地区のパイプ役を担っています。



優勝杯を前にする山田さん(写真左)

「競技規則は以前よりとても簡素化しました。ぜひ審判員試験に挑戦してほしい」と会員に呼びかけ、「私も80歳になり後継者を育成し、第一線から離れようと考えています」と語る反面、生き生きとプレーする人たちの表情を見ていると元気ももらっていると話していました。